

ほのぼの

第55号

令和2年

7月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



絵 米田光輪

雨が降れば傘を

住職

不要不急の外出は自粛してくださいという要請が出てからは、日常生活が一変しました。

「朝から晩まで子供の世話でほんと疲れました」と三ヶ月の学校閉鎖で音を上げていた母親がいました。旅行に行きたいのに行けない人も、朝・昼・晩、家族の三食作りに励まざるをえないお母さんも、思うように患者の治療ができない医療関係の人もいました。やり場がなくイライラしてストレスのたまった人があふれています。少しずつ改善される方向に動いてはいくようなではありませんが。

自粛要請を受けて自由行動を制限される状況が長くなるほど各方面に影響が出てきます。感染防止策は人の動きが少ないほど効果があります。経済活動はこれとは逆です。人や物が動くほど経済は活発になります。どちらに軸足を置くか、歯がゆいところです。

世界中が新型コロナウイルスに翻弄されている状況です。今年開催される予定であった東京オリンピック

クも来年に延期されました。残念なことです。

地震・津波・台風など自然災害は人間の知能では及びもつかない現象です。新型コロナウイルスも同様です。積み重ねた人間の知力を一瞬にして打ち砕き、自然の強大な力を見せつけます。そんな時に私たちは「こんなはずじゃなかったのに」と思います。

無常の世ですから日々条件は変わる。何が起きるか分からない人生なのに、変わらぬものと、思い込んでいる自分がいます。予定通りにならず、どのようなことが起きようとも、「そのことをどう受け取るか」は自分で選ぶことはできます。この受け取り方が大切です。人生が変わります。「そのことが自分に何を教えてくれているのか、そこから自分は何を学ぶべきか」です。「いい人生をありがとう」といって生きさせてもらえるかどうかが決まります。ただ果然として過ごすわけにはいきません。コロナ感染防止には、マスク着用、外出後は手洗い・うがい、外出の自粛、集まりも三密にならないようになどの自粛項目がテレビなどで広く伝えられました。自分が

人に感染させない、自分も感染しないためのルールです。しかし、残念ながらルールは人を分けます。人を分けると差別感ができます。しかも「善いことをしているという意識で生ずる差別です。ルールを守る人と守られない人に分かれます。守る人は正義の人、守らない人は不正義の人と判断されます。また必然的に、罹病した人と健康な人とに分類されてしまいます。

「人間は正義に立つとどんな残酷なことでもする」作家の司馬遼太郎さんの言葉です。責任を持たない正義感ほど怖いものはありません。コロナに罹病した人は治っても人からも避けられる。コロナの医療関係者の子供たちにまで厳しい目で見られているという報道もあります。「鬼は外、福は内」がこの世の考えです。しかし、「鬼も捨てない」生き方を仏さまは私たちに教えてくださいました。自分にとって都合のいいことも悪いことも起きるのが人生です。他をさばき、他を責めずにはおれない世界は地獄です。この世を地獄にしない生き方があります。雨が降ったら傘をさしましょう。



「師主知識の恩徳・」曇鸞菩薩（後半）

副住職

かつて龍樹菩薩は、仏道には菩薩の修行をこの世で仏に成るために自力で励む難行道と



浄土に生まれ往く易行道の二つあることをお説きになられました。そして、天親菩薩の著された「浄土論」こそが、だれもが浄土に生まれて仏に成ることができるという易行道を説かれた教えであると曇鸞大師は讃えられたのです。

人は皆、苦しみを除きたいと願うものですが、自ら起こす煩惱によって苦しみの連鎖から自由になることができません。そして、苦しみの原因である煩惱の中で迷い続けるし

かない私のようなもののために釈尊が説かれたお経が仏説無量寿経です。また、その釈尊が説かれた阿弥陀仏の本願の教えを明らかにされたのが天親菩薩でした。そして曇鸞大師が著された「浄土論註」により弥陀の本願とは他力念仏であると明らかに知ることができたと、親鸞聖人は高僧和讃で述べておられます。正信偈の中に「報土の因果、誓願に顕す」とありますように、阿弥陀仏の浄土（報土）に生

まれることができるのも往生して仏と成るという結果も阿弥陀仏の誓願によるのです。自分の力によって往生できるのではなく、すべて阿弥陀仏の本願のはたらきひとつによって往生させていただく身となるのです。そのはたらきのことを「他力」として明らかにしてくださりました。「論主の一心」とけるをば 曇鸞大師のみことには 煩惱成就のわれらが 他力の信とのべたもう」と高僧和讃にあります。天親菩薩が「一心」とかれたものを曇鸞大師のお言葉では、煩惱まみれの私たちのための「他力の信心」と述べられたのです。また「往還回向由他力」と正信偈にありますように、浄土に往生することである「往相」も、他の衆生を浄土へ導くために再びこの迷いの穢土に還ってくる「還相」も共に他力によるのだと説かれています。

曇鸞大師は山西省の石壁山玄忠寺に長く住まれて他力念仏の教えを広められましたが、最晩年は平遥山寺に移られ六七歳で往生されました。ある日の夜半、命終の時を覚った曇鸞大師は直ぐに弟子たちを集め教誡を与えて皆で称名念仏するように仰いました。手に香炉を持ち、西を向いて座した曇鸞大師は念仏の声の中、日の出とともに往生の素懐をとげたということです。



川口昭次様が四月三十日、九十三才で往生されました。二十年ほど前「御堂さん」に掲載された文をここに紹介します。

「妻が引き合わせてくれた」縁

信行寺が平成十二年の四月、再建落慶法要が勤められました。法要実行委員の一人として参画させていだいた私は、堂内に響きわたるお念仏を耳にしながら、ここまでの長い道のりを振り返っておりました。楽しみにしていたこの日を待たずに逝った妻を思うと、万感胸に迫る想いでいっぱいでした。

お寺とは、戦前にここに引っ越してきた当時からの
お付き合いです。若いころに愛読
した、吉川英治の「親鸞」の強烈
な生きざまとお人柄に心を打たれ
た私でしたが、むしろ昭和三十二
年に結婚した妻の方が聞法には熱
心でした。仏教婦人会や法座にも
必ず参加し、次第に私もつられる
ようにお寺の門をくぐるようにな
ったのです。これはとてもうれし

いことで、丑年生まれの妻にも「ウシにひかれて信行寺まいりやな」と冗談めかしたものです。お寺の壮年会主催による「親鸞聖人、蓮如上人聖跡参拝旅行」や神戸別院での連続研修会にもふたり一緒でした。

平成七年一月。震災から一週間。住まいの明石市は幸い被害が少なくすみましたが、次々に入る悲惨なニュースに、職場が心配でならなかった私は、やっと復旧したJRに乗り込み、神戸へ入りました。電車は須磨駅までしか行けません。板宿駅からバスが出ていると聞いて、雑踏の中、ガレキを踏みしめ踏みしめ歩きました。崩壊と火事で見える影もありますが、ここらは丁度お寺のそばです。急に気がかりになりました。そこには塀と門扉を残して、あとは何もありません。段ボールに「無事です。〇〇に避難しています。」と書きおきがありました。

それから数日後、早くも動き出しました。三か月後にはプレハブの仮本堂を建てて、ここを拠点に法座活動が再開されました。着の身着のままで焼け出され、坊守さんがショックで声も出なかったほどとは思えません。三十人も入ればいっぱいの仮本堂も満堂です。

再建話もそんな門徒さんから提案されました。特に年配の方や総代さんが中心となられたそうです。門徒さん二十八人がお亡くなりになって、助かった中でも震災で離散した方が多く、寄付を募る建設委員さんは苦労されました。そんな時、「ご住職自ら、「再建したあかつきには、みんなの手作りの法要を勤めたい。ぜひ法要委員に」と、私に要請がありました。自信はありませんでしたが、「失敗したらワシが責任とるけん。まあ、がんばってみよやないか」の一言にホッとした思いでお引き受けしました。案内状や寄進名簿の作成、懇志金額のリストアップや掲示など、震災を機に退職したはずが、かえって忙しくなったようです。

そんな中、暗闇に突き落とされたような出来事が起こりました。妻の発病です。お寺の起工式を手伝った二十日後、「あと一年の命」が宣告されたのです。二十四時間付き添い、日に日に衰えてゆく妻の顔を見るのは辛かった。そんな辛さや悲しさを、かえって法要準備の忙しさが忘れさせてくれるようでした。

新しい本堂で、ここの再建を誰よりも楽しみにしていた妻の一周忌を勤めさせていただきました。妻の引き合わせ

てくれた「縁で、それこそ「法然さま」とも思える」院さんの広島弁の「ご法話を聞かせていただくのが楽しみとなった私です。

信行寺でもっとも心に残るのは、「ご住職の発案による平成十四年六月の「信行寺門信徒会」発足です。この会は浄土真宗であるという意識をもち、お念仏の教えを次世代に伝えるための活動をすることを目的としています。

初代会長に谷川さん、副会長に長井さん、企画委員に川口さんなどが選任され、私も副会長として微力ながら協力することができました。そして、平成十四年七月に門信徒会会報「ほのぼの」の創刊号を発行することができました。現在、五十号を超えるまで発行できているのは、門信徒会の皆様のご協力のおかげだと思います。「ほのぼの」の発行に際し、種々と尽力された川口さんが四月に大往生されました。川口さんは仏事に関する知識が豊富で、私達をいろいろと指導してくれました。心から感謝いたします。

月田 幹雄



法語カレンダール



念仏もすところに
立ちよがていく力が
あたえられる

今回は、八月のことばを紹介します。

これは、西元宗助先生が「み仏の影さまさまに」のなかで述べられた一文です。

西元先生は、信行寺でも度々法話していただきました。また、坊守の大学教授でもありました。

源信和尚の若い頃のエピソードがあります。若くして比叡山でもその名をとどろかせる立派なお坊さんでした。ある時、天皇の御前で經典の講義をなされ、天皇はたいそう喜ばれ、褒美を授けられました。源信和尚はその褒美をお母様に贈られました。「これでお母さんに恩返しができる。きつと喜んでくれる。立派に

なった私を褒めてくれる。」と考えました。ところが、お母様は、ご褒美を一切受け取らず、「あなたは名誉や地位を得るために仏門に入ったのですか。世の人々の助けとなるために、仏の教えを学ぼうとしたのではないのですか。」といった内容の手紙を送られました。源信和尚は、自らの姿勢を恥じ、改めて仏道、念仏の道を精進されたそうです。

本当の感謝とは何か。ご恩に報いるとは何か。私たちは自分優先の感謝を相手に押し付けて、それで恩に報いたと勝手に納得しています。それでは本当の「感謝」「恩」とはいえません。「恩」は私が誰かに差し上げるものではなく、私が様々な方々からいただいたものだということ。いただいた「恩」であることを知ってこそ、初めて「ありがたい」「もったいない」の心が生じるのです。

念仏も同じです。私たちが「南無阿弥陀仏」と称えることは、阿弥陀さまからいただいたお念仏であること、知ることが、信心を得たということなのです。そして、及ばずながらせめてできるだけお役に立ちたいと願うようになるのです。

日頃の疑問を考えよう

Q 新型コロナウイルスの影響が様々なところに出ています
が、お寺はどのような様子ですか？

A 三月から、法話・行事などの中止や延期を余儀なく
されました。現在は状況を見ながら、縮小して実施し、オン
ライン配信も行っています。

Q どのようにすれば、オンライン配信に参加でき
ますか？

A オンライン配信（ズームを使います）を希望す
る方は、下記のメールアドレスに「〇〇〇ズーム
希望」と書いてお問い合わせください。毎月の法
話も配信しています。

メールアドレス
shingyouji2020@gmail.com

新型コロナウイルス感染症に関する「念仏者」としての
声明（西本願寺）を抜粋して記述しておきます。

釈尊が明らかにされた苦しみの根源である無明煩惱、ま
た親鸞聖人が「煩惱具足の凡夫」という言葉で告示にな
った私たち人間の根源に潜む自己中心性に思いをいたし、
このような時にこそ、人と喜びや悲しみを分かち合う生き

方が大切ではないでしょうか。仏教には、「あらゆるものは
因縁によりつながり合って存在しており、固定した実体
はない」という「縁起」の思想があります。新型コロナウ
イルスの感染拡大の原因は人との接触であるとされ、本来
大切な人との「つながり」が、今は安心感ではなく、不安
をもたらすものとなってしまっています。しかし、「つな
がり」を表面的に捉え、危険なものと否定的に考えてはな
りません。世界的な感染大流行という危機に直面する今だ
からこそ、私たちは仏教に説く「つながり」の本来的な意
味とその大切さに気づいていく必要があります。私という
存在は、世界の人々との「つながり」の中で生きているか
らこそ、やがて共にこの苦難を乗り越えた時、世界中の
人々と喜びを分かち合えることでしょう。それぞれの立場
において、この難局で法灯や伝統を絶やさないために何が
できるかを考え、「そのまま救いとる」とはたらいてくだ
さるお念仏の心をいよいよいただき、共に支え合い、力
を合わせるのです。誰もが安心して生活できる社会を取り
戻すことができるよう、精いっぱい
つとめを果たしてまいりましょう。



信行寺行事予定とご案内

今年度は、新型コロナウイルスの影響で、花まつりの中止、門信徒会総会の中止（別紙お知らせをご覧ください）、永代経法要の延期（六月末）と予定の変更を余儀なくされています。左記の予定も変更するかもしれません。確認の上、ご参加頂きたいと思います。

◇本堂納骨お盆法要

八月十六日（日）



◇夏期特別法座

八月十八日（火）

◇秋の彼岸法要

九月十九日（土） 天岸 浄円 先生

二十日（日） 住職

◇西大谷納骨参拝

十月十八日（日）

編集委員より

いつも通り、あたりまえという訳にはいかない日々を過ごすこととなりました。孫が遊びに来るのを迎えることも、年老いた母を見舞いに行くこともできず、思い通りにならないということを知らされました。いつもご法話で聴かせていただきながら、改めて身に滲みました。でも、マイナスな事ばかりではなく、これを機に新しい挑戦も出来ました。お寺からインターネットの会議システム利用した法話会や遠く離れた人とのビデオ通話など、初めての経験を得ました。不自由が発明・発見の素になると聞いたことがあります。文明の利器が発達して、研究が進んで暮らし易くなる、いいと思います。今までもいろいろな困難がありながら、乗り越えてきたのですから、今後も「なるようになる、なるようにしかならない」という思いです。今だからできること、今しかできないことをしながら次に進めたいと思います。いつ何があっても、その時出来ることをして前向きに過ごしていきたいと思いました。

石田 智子